

二〇二四年度入学試験

A1

京都先端科学大学附属中学校

国語

注意

- 問題は全部で十四ページあります。
- 「試験開始」の合図があるまで問題を開いてはいけません。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 質問がある場合は、静かに手をあげ、教員が来るのを待ってください。
- 「試験終了」の合図があったらすみやかに解答をやめ、以後は教員の指示にしたがってください。

一

次の言葉と同様、または似た意味の言葉を語群の中から選び、漢字に直して答えなさい。

- 1 賛成
- 2 短所
- 3 消息
- 4 勤勉

語群

どりよく けつゐ どうい けってん なつとく おんしん がくしゅう

二

次の言葉と同様の意味の外来語を、()内の指示にしたがって答えなさい。

- 1 科学技術 (「テ」から始まる六文字)
- 2 持続できる (「サ」から始まり「ル」で終わる)
- 3 助言 (「ス」で終わる五文字)
- 4 議論 (「ン」で終わる八文字)

③ 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

タヌキには、あるイメージがあります。イヌのような中型哺乳類で、目の周りが黒くて間の抜けたような、少なくとも鋭さやケンアクさは感じられない動物だと思われています。それには、やや太めの体型も影響しているようです。実際、タヌキは冬越しに備えて秋によく太り、夏よりも30パーセントくらい重くなり、コロコロした体型になります。そうしたこともあってか、「ポンポコタヌキ」などと呼ばれ、腹つぶみを打つなどといわれます。

本気で信じる人はいないと思いますが、タヌキはキツネとともに、人をだますともいわれます。ただ、そのだまし方も「キツネは美人に化けるが、タヌキは田舎娘で、化け方は不完全で尻尾は残ったまま」などとイメージされます。これもキツネがつり目でスラリとしているのに対して、タヌキは目の周りが黒くて垂れ目、でっぴりした体型からくるイメージによるものと思われれます。いずれにしても、大方の人がタヌキに対しては少し間抜けで、お人好しというイメージを持っているようです。

そういうタヌキのイメージはのどかなものですが、糞虫はどうでしょう。私は『ファーブル昆虫記』の愛読者でしたから、そこに登場する糞虫には良い印象を持っていましたし、実際に本物を見た時もその形をすばらしいと感じました。しかし私は普通の人よりはるかに生き物好きなので、私の評価はあまり標準的とはいえません。もしみなさんが私と同じように糞虫を採集して飼育したいと思つたとします。そしてそれをお母さんに説明したらどうなるでしょう。

「汚い糞に来るムシでしょう。お願い、そんなものを家の中で飼わないで」と言われるのが一般的なのではないでしょうか。

a カラスはどうでしょう。カラスにはいろいろな種類がいますが、町にいる黒いカラスはハシブトガラスとハシボソガラスの2種類です。嘴がスラリとしてガアガア鳴くのがハシボソガラス、太い嘴が先端で急に曲がり、カアカア鳴くのがハシブトガラスで、こちらの方が都会に多くいます。

東京でカラスが大きな問題になったことがありました。1980年代には6000羽程度であった東

京のカラスは1990年代に急増して、2002年、2003年には3万5000羽レベルに達しました。

増えたカラスはほかの鳥の卵を食べたり、後ろから人を襲うなどして、都民からの苦情も多くなりました。なんととっても大きな問題は、ポリ袋ぶくろに入れたゴミをカラスが破って散乱させたことです。【A】

このため東京都としてはカラスを減らさざるを得なくなりました。カラスを罠わなで捕つかまえたり、巣を見つけて撤去てつきよするなどして、多い年には1万5000羽を上回るほどの多数のカラスを捕獲ほかくしました。その効果があつて、2004年くらいから急激に減少して1万羽ほどになり、これに伴ともない、都民からの苦情も減りました。【B】

タヌキはお人好し、糞虫は²フケツふくくなムシとされますが、ではカラスはどうでしょう。童謡どうたうに歌われる「七つの子」のカラスはのどかな雰囲ふんい気ですが、カラスが好きという人は多くありません。【C】

またカラスはゴミあさりに見るように雑食性であり、貪欲どんよくな食べ方をします。そして動物の死体を食べることもあり、死にそうな動物を攻撃こうげきして殺すこともあります。こうしたことを知っていた昔の人は、カラスを不気味な鳥と考えたようです。【D】

ただし単にいやな鳥というだけではなく、カラスは不思議な能力を持つ存在というイメージでもあったようです。日本でも古代にはカラスは聖なる鳥だったようで、神話に登場する三本足のヤタガラスは、不思議な能力を備えた神の使いとされていました。

b、聖書にあるノアの方舟はこぶねの話では、洪水こうずいの後、陸があることを伝えるにハトが戻もどって来ることが書かれています。ノアが最初に放ったのはカラスで、カラスは「地上の水が乾かわくのを待つて、出たり入ったりした」と書いてあります。

そのあとでハトを放つたら、ハトは戻ってきました。不気味な鳥であるカラスは戻らず、清い鳥とされるハトが戻ってきたところに、不安から希望への変化が象徴しょうちゆうされているのかもしれない。

いずれにしてもカラスは特別な鳥で、不気味さの方が勝まさるように思います。少なくとも現在の日本ではゴミ問題とも相まって、迷惑めいわくでいやな鳥と感かんじられているようです。

そのようなイメージを持たれるカラスですが、動物学の³タイシヨウとして調べられた³カラスの知能

は驚くべきものです。樋口広芳著の『ニュースなカラス、観察奮闘記』には、カラスのじつに頭のよい行動が紹介されています。例えば公園の水飲み場の水道に来て、蛇口をひねって水を出して飲むというのです。それどころか、水浴びするときは蛇口を大きく回して出てくる水の量も変えるというのだから驚きます。

またクルミは栄養のある果実ですが、殻が硬いので、とてもカラスが割れるものではありません。カラスはクルミを交差点の自動車が通るところに置いて、自動車が通り過ぎたあと、轆かれて割れたクルミの中身を食べるそうです。

そのほか、石鹼やロウソクを持ち去るとか、巣材にハンガーなどを使うなど、いろいろな悪さをするそうです。驚かされるのは、そのどれも新しいものに出会ったときに工夫をして利用する、いわば「開発能力」が優れていることです。

東京のカラスの駆除については、都民からとくに反対はないようです。その数は年間1万5000羽にもなり、5000万円もの費用がかかっているにもかかわらず、です。もしシカやクマが駆除された場合なら、必ず「殺すなんて残酷だ」と批判があります。私は、このことはやはりカラスに対してあまり良い印象が持たれていないからだと思います。

しかし考えてみてください。すべての動物と同じく、カラスは生きるために最大限の努力をして食物を確保しています。その食料事情が良くなった結果、数が増えたのですが、その食料であるゴミは3章2節で見たように、東京に膨大な量の食物が国の内外を問わず持ち込まれ、人が飽食して出した残飯にほかなりません。

つまりカラスを増やしたのは人間です。もっと正確に言えば、人間の浪費というおこないです。その結果増えたカラスを、「迷惑をかける害鳥だ」として多数駆除しているのです。⁴ これは客観的に見て、公平とはいえないでしょう。

見るともなく見て「カラスは黒くてゴミをあさる、いやな鳥」と感じるのと、自分で観察してカラスの実態を知るのでは、カラスに対する見方はまるで違うものになります。自分で観察しなくても、本を読

んだり、きちんとネットで調べたりすれば、その動物についての正しい知識を得ることはできます。正しく知れば、その動物の存在が大きく感じられます。

私がみなさんをお願いしたいのは、どういう動物に対してでも、知らないままに、「汚い、醜い、気味が悪い」などマイナスなイメージを持たないでほしいということです。もしみなさんがこれまで糞虫やヘビやカラスにマイナスなイメージを持っていたとすれば、それは初めからではなく、育つ中で間違っただけのようなマイナスイメージを「学んでしまった」からです。

私は大人がいやがる糞虫を小学校低学年や幼稚園児に見せて、触らせたことがあります。糞虫だから気持ち悪いという子がいるのではないかと思っていました。どの子もいやがることはまったくありませんでした。このことから、子供はもともと偏見を持っていないのに、周りの大人が偏見を教えることでまじがったイメージを持つようになるし、d、正しく伝えることで、不愉快と感ずることを乗り越えることもできるのだと思いました。

誰でも自身が育った社会の価値観の影響を受けます。古代の日本人はカラスを聖なる鳥と思ったようですが、今はそうではありません。コウモリは不気味な動物とされますが、コウモリの漢字である「蝙蝠」の「蝠」は「福」と通じることから、中国では縁起が良いとされるそうです。これらがまったく根拠のない偏見であるのは明らかです。

このことからわかるのは、実態を知らないで無批判に言われていることを受け入れるとまちがったイメージを持つ、つまり偏見を持つということです。⁵ その偏見の大半は後天的に社会、とくに家庭で「教えられる」ことによるものです。

(高槻成紀『都市のくらしと野生動物の未来』)

問一 〰〰〰部 ー〰3のカタカナを漢字に直しなさい。

問二

a

く

d

 に入る言葉としてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ では ウ 逆に エ たとえば オ また

問三 ー部 ー「あるイメージ」とありますが、その具体的なイメージを本文中から十字前後でぬき出しなさい。

問四 ー部 2「大きな問題」とありますが、その内容を五十字以内で説明しなさい。

問五 本文中の【A】〰【D】のいずれかに次の一文が入ります。ふさわしい箇所かしょを記号で答えなさい。

その理由は、やはり全身が真っ黒な見た目によるものでしょう。

問六 ー部 3「カラスの知能」とありますが、それはどのようなものですか。本文中から五字以内でぬき出しなさい。

問七 ー部 4「これは客観的に見て、公平とはいえない」とありますが、その理由を簡潔に答えなさい。

問八 ー部 5「その偏見の大半は後天的に社会、とくに家庭で『教えられる』ことによるものです」とありますが、それはどういことですか。簡潔に説明しなさい。

四 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

清澄……手芸が得意な高校生。姉である水青のウエディングドレスを作ろうとしている。
水青……清澄の姉。

全……清澄と水青の父。一緒には暮らしていない。

黒田……全の務める縫製会社の社長であり、友人。

清澄と黒田が縫製の作業を見守りながら話している場面である。

全はそれから、ぶっ続けて裁断と縫製をおこなった。幸田さんの連絡を受けて駆けつけた。ジュウキョウインふたりがミシンを手伝った。わいわいがやがやとかしましくなる。

通常、仮縫いはシーチングを用いるが、全は実際のドレスの生地をいきなり使うと言った。たしかにそのほうがはやすいし、無駄がない。清澄は作業に参加したいようので、全のまわりをうろろして、みんなから「ちよっとどいて」を連発されていた。

「座つとけや」

見ていられず、腕を引いてソファアに座らせた。

「水青ちゃん、ちよっともう一回着てみて」

水青が幸田さんに呼ばれて行って、応接室にふたりきりになった。

所在なげに、清澄が部屋を見まわす。応接室、といってもめつたに客など来ない。棚には生地見本や雑誌が無造作につこんであるし、そのほとんどが薄く埃をかぶっていた。

「僕とおばあちゃんは仮縫いまで何か月もかかったけど、あの人たちは一日でできんねんな」

清澄が放心したように呟いた。

「あたりまえや。プロやぞ」

わああ、というような声が聞こえてきて、部屋をのぞきにいった。

幸田さんたちと全が下僕のようにひざまずいており、すくと立つ水青は童話のお姫様のように気高く、美しく見えた。

自分に合った服は、着ている人間の背筋を伸ばす。服はただ身体を覆うための布ではない。世界と互角に立ち向かうための力だ。

清澄が頬を紅潮させて、駆け寄っていく。なにごとかを言ったようだったが、聞きとれなかった。全がこれまたなにごとかを言い返して、それから清澄の頭に触れた。髪をかき乱された清澄が、ふわりと表情をゆるませる。

声が出ない。唇が乾いて、口を開いたらばりばり裂けてしまいそうだ。ほんの数メートルの距離が果てしなく遠い。

徒競走で転んで、砂まみれの姿でこっちに手を振っていた清澄。その瞳は、まっすぐに全だけを捉えていた。中途半端に満たされていた父性のようなものはやっぱり「のようなもの」でしかなくて、彼らが笑いかう輪の中には、ぜったいに入ることができない。そう思い知らされる。

結婚するということが、親になるということ。「ピンとこない」という理由で、どちらも追求することなく今日までやってきたけれども。自分の現状に不満があるわけではないのだけれども。

応接室に引き返して、静かにドアを閉める。

涙が出てしまいそうな気がした。気がしたただけだ。こんなことでいちいち泣くわけがない、子どもじゃあるまいし。けれどもけれども言っていたって、過去は変えられないんだから。

ドアが開いて、清澄が入ってくる。さっきまで頬を紅潮させていたのに、その表情は暗い。

「どうした」

「いや……結局、ドレス、自分の手につくれんかったな、と思って」

隣に腰かけた清澄が、ふう、と息を吐いた。

「僕には、やっぱりまだ、はやかったんかな」

若者特有の感情の浮き沈みの激しさが鬱陶しくもあり、うらやましくもある。

棚から本を一冊抜き取って、清澄の膝に置いた。

「ホワイトワークって知ってるか？」

ホワイトワークは簡単に言えば、白い布に白い糸で刺繍を施す技法だ。色を使わない素朴な装飾なら、水青の好みに合いそうな気がする。

「刺繍に関してなら、全よりお前のほうが上ちゃうか」

「……そう？」

清澄の頬が、³ふたたび紅潮する。

「他の本も見ていい？」

「もちろん」

民族衣装のデザインや伝統の刺繍や織物についての本は、はんぶん趣味はんぶん仕事で集めていた。

日本の文様を²シユウロクした図案集を、清澄は立ったまま熱心にめくっている。

「気に入ったんなら、持っていてもええから」

返事はなく、かわりに「ゴゴゴゴ」という音が響き渡った。腹か。今鳴ったのは、お前の腹なのか。

立ち上がって上着を³羽織ると、清澄がふしぎそうな顔を上げる。

社長のおごりならば寿司だ、いや焼肉だとわいわい騒いだあげく、近所の中華料理屋に落ちついた。みんな一緒に座れるはずもなく、テーブルふたつとカウンターにわかれた。そう仕向けたわけではないが、カウンターに座ったのは全と、水青のふたりだった。清澄は俺の隣でめずらしそうに壁のメニューを見上げている。

両者神妙な顔つきで、いったいなにを話しているのだろう。そう思ってから、そんなことは俺が干渉するべきではないと思ひ直す。

家庭に向いていない者同士が、なんとなく一緒にいる。自分と全の現在の暮らしについて、そう考えてい

た。でも全には血を分けた子どもがふたりもいる。「よくわからないけど向いてないかも」で今日まで来た俺との違いは、とてつもなく大きい。

「黒田さん」

ふいに、清澄が口を開いた。

「あの、いろいろありがとう」

ドレスをつくったのは全と幸田さんたちだ。礼なら彼らに、と言いかけたのを「そうやなくて」と遮さえぎられる。

「そうやなくて、お父さんのこと」

今までずっと、ありがとう。頭を下げられて、困った。なにを、とうまく発音できなかった。どうしても唇が震える。

「なにを言い出すかと思ったら」

「ありがとうって僕が言うのもおかしいけど、でも、良かったなと思って」

自分は姉や母や祖母と暮らしていて、けれども父はひとりきりで、それが子どもの頃から気になっていた、という清澄の話聞きとるのに、だいぶ身体を傾かたむけなければならなかった。隣の四人掛がのテーブルに陣取じんとった幸田さんたちがビールを飲んでもいいのか、餃子ぎょうざは何人前にするのかと騒いでいる。店のテレビの音が聞こえないぐらいの音量で。

「俺は養う家族もおらんし、全ひとりぐらい、その、べつに……けど全にはお前ら家族がちゃんとおるし……」

喋しゃべりながら、頬がゆっくりと熱を帯びていく。自分でもなにを言っているのか、なにが言いたいのか、ちつともわからなくなってきた。

清澄がゆっくりと瞬まばたきをした。お前ら家族って、と口の中でもごもご呟つぶやいてから、首を傾かしげた。

「お父さんの家族は黒田さんやで」

「え？」

声が裏返ってしまい、ますます頬が熱くなったが清澄はまるで気にしている様子がない。

「毎日一緒にごはん食べて、心配とかしてくれて、これから仕事とかいろいろ、一緒にやっていくって決まってる、そういうのを家族って呼ぶんちゃうかな」

あの人たちもやろ、と幸田さんたちのほうに顔を向ける。

「あの人たちも、黒田さんの家族やろ」

幸田さんたちのテーブルでギヤーという声上がる。餃子のたれにラー油を入れすぎたとかなんとか、そんな他愛ないことでよくあんなに騒げるものだ。

「それに、僕の家にはお父さんはおらんけど」

やかましい幸田さんたちに気を取られているふりをしながら「ああ」と相槌を打つ。「外にはお父さんがふたりおるような感じがしてたし、なんていうか、ちよっとお得感があつたな。黒田さん、運動会とかも見にきてくれたし。あ、黒田さんはもう忘れてるかもしれないけど」

答えようとしたら「お待たせしました！」と湯気のたつ炒飯の器が置かれて、もうなにも言えなくなつてしまった。喉の奥からせりあがってくる、この熱いかたまりを飲みこんだら、あとでちゃんと「覚えてるよ」と伝えよう。覚えてるに決まっていると。

中華料理屋の前で解散した。ドレスは来週いっぱい仕上げると全は約束し、水青と清澄は駅に向かつて歩いていく。

「そしたら社長、全さんも、また月曜日に」

「うん。ありがとう」

幸田さんたちは最近ブロッコリーが高いの、もやししか買えないのとまたもややかましく喋りながら、帰っていく。

ふたりになると、みようにしんとしてしまう。微妙に距離をとりながら川沿いの道を歩いていく。うす水色とオレンジと白の三層になった空に、灰色の雲が模様を描いていた。並ぶ家々はただの黒い輪郭

になり、コンビニや自動販売機はんばいきの光がまぶしく目を射る。空の色を飲みこんだ川はサテンの布のきらめきに似ている。

「なあ、黒田」

背後を歩いていた全に呼ばれて、振り返った。

「ネットショップに出してるあの、秋冬のあれ、商品追加するしたらまだ間に合うやろか」

「そんなん、いつでも追加できるけど」

「そうか。そうやな」

ははは、という笑い声が鼓膜こまくを打つ。スケッチブックのまっさらな頁ページをめくるような声だった。

「なにを追加する気や」

「うん。ちよつとな、今日水青のドレスをつくりながら、ちよつと新しいスカートを思いついた。ワンピースに重ねて着てもいいし、単体でも着られるようなやつ」

他人の目にかわいらしくうつるのは、けっこう簡単なことやねん。女の子って基本みんなかわいいからな。存在自体がかわいい。けどな、本人が着とって落ちつかへんような服はあかん。座っただけでいららして、肩に力が入ってしまったって、疲つかれてしまう。疲れると自分で自分が嫌いになる。

全は水青に向かって、たしかそう言っていた。ナチュラル系、と浜田さんが評したワンピース。なんにも考えずにただ無難なものをつくっているのかと、勝手に思いこんでいたけれども。

無意識のうちに口笛くちふえを吹ふいていた。しずかな湖畔こはんの森のかけから、もう起きちゃいかがとかが鳴く。湖うみの底の怪物かいぶつは眠ねむってなんかいなかったし、その胸で燃える情熱も消えてなどいなかった。

「黒田、お前……口笛うまいやなあ」

まるで今はじめて聞いたかのように、全が目を丸く見開いている。

(寺地はるな『水を縫う』)

問一 〰〰〰部 1 3 のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 〰部 1 「所在なげ」とありますが、その意味としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 手持ちぶさたな様子で イ 落ち着きなく
ウ 心配そうな表情で エ イライラしながら

問三 〰部 2 「頬を紅潮させて」・3 「ふたたび紅潮する」とありますが、そのときの「清澄」の気持ちとしてふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア おどろき イ いかり ウ 安心 エ 希望 オ はじらい カ 興奮

問四 〰部 4 「俺が干渉するべきではないと思ひ直す」とありますが、それはなぜですか。その理由を二十五字以内で説明しなさい。

問五 〰部 5 「お父さんの家族は黒田さんやで」とありますが、「清澄」の考える「家族」とはどのようなものですか。簡潔に答えなさい。

問六 〰部 6 「覚えているに決まっている」とありますが、それはなぜですか。その理由を簡潔に説明しなさい。

問七 — 部 7 「湖の底の怪物」とありますが、それは何ですか。簡潔に答えなさい。

〈問題はこれで終わりです〉

受験番号

学校名

小学校

氏名

一

1

2

3

4

二

1

2

三

3

4

三

問一

2

3

問二

a

b

c

d

問三

問四

問五

問六

四

問一

2

3

問二

問三

2

3

問四

問五

問六

問七

点線より下には何も記入しないこと。
（成績集計欄）

A1

国語A 1

【計8点】

- 1 同意 2 欠点 3 音信 4 努力

【計12点】

- ① テクノロジー ② サステイナブル ③ アドバイス
④ デイスクッション

【計42点】

- 問一 1 陰悪 2 不潔 3 対象

(2点×3)

- 問二 a イ b オ c ア d ウ

(2点×4)

- 問三 少し間抜けで、お人好し

(5点)

- 問四 カラスの数が急増し、ほかの鳥の卵を食べたり、人を襲ったり、ゴミを散乱させたりしたこと。

(5点)

- 問五 C

(3点)

- 問六 開発能力

(4点)

- 問七 カラスを駆除しなければならない状況を作った原因は人間にあり、カラスは生きるために最大限の努力をしただけであるから。

(6点)

- 問八 自分が育った社会の価値観の影響を受け、間違ったイメージを持つことになってしまったこと。

(5点)

【計38点】

- 問一 1 従業員 2 収録 3 はお

(2点×3)

- 問二 ア

(4点)

- 問三 2 カ 3 エ

(3点×2)

- 問四 黒田さんは全や水青の本当の家族ではないから。

(5点)

- 問五 お互いに思いやり、生活や仕事を共にする人たち。

(5点)

- 問六 黒田さんにとっても清澄は家族のように大切な存在だから。

(6点)

- 問七 全の、今までくすぶっていた服作りの才能。

(6点)